


### 3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) デルフィニウムの栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)            デルフィニウムの栽培管理            年末出荷用電照ギクの栽培管理            シクラメンの仕上げ時期の管理            施設花き類の身近な防寒対策</p> <p>9月22日頃に植え付けられた促成栽培の出荷時期は、12月上旬となる見通しである。そこで、デルフィニウムの中期生育管理については、次の点に注意する。</p> <p>11月に入ってから花穂伸長期となるため、夜間の最低温度を12～13℃になるよう保温、加温する。ただし、高温等の影響で充実不足の株（抽台時の花茎の太さが鉛筆より細い）から一番花を採花すると株が弱り、二番花以降の採花に影響するので、このような株の多い圃場では年内採花をあきらめ、最低夜温を8～10℃に下げ生育をゆっくりと進めることで株の充実を図る。日中は20℃程度で換気するが、特に気温の低い時にサイド換気で冷風を直接植物体に当てると開花が抑制されるため、できるだけ谷換気か天換気とする。</p> <p>また、花穂発達期にかん水量が多くなると花穂が間延びし（小花と小花の間隔があく）切り花品質の低下を招くため、収穫期にかけて徐々にかん水量を少なくしていく。追肥は窒素、リン酸、カリとも成分量で4～6kg/10aを2週間に1回程度施用する。</p> <p>ハウスを閉め込む機会が多くなると、うどんこ病の発生が多くなるので適切な防除に努める。</p>



写真1 一番花抽台後の花穂発達、伸長前の生育状況

項 目	作 業 内 容												
<p>(2) 年末出荷用電照ギクの栽培管理</p>	<p>年末出荷用電照ギクの消灯時期は、一般的には出荷予定の2か月前で10月中旬となり、11月は花芽の発達時期である。</p> <p>表1 主要品種の花芽分化の適温(消灯後の加温温度)</p> <table border="1" data-bbox="512 468 1307 568"> <thead> <tr> <th>品 種 名</th> <th>神馬</th> <th>精興の誠</th> <th>東菊</th> <th>花秀芳</th> <th>精興黄玉</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>花芽分化の適温度</td> <td>18</td> <td>18</td> <td>15</td> <td>15</td> <td>18</td> </tr> </tbody> </table> <p>ア 温度管理</p> <p>昼温は20～25となるように保温、換気に努める。夜温は、消灯1週間前から消灯3週間後までは栽培品種の花芽分化適温(表1)かそれより2程度高めに管理し、花芽分化をスムーズに促す。その後の夜温は12～15で管理するが、目標とする出荷期となるように花蕾の発達を見ながら温度調節を行う必要がある。</p> <p>写真2 年末電照ギクの発蕾前の生育状況</p>  <p>なお、3か月予報では11月の気温は高く、12月は平年並みの予想(10月25日高松地方気象台発表)であるので、適切な温度管理を心がける。膜切れ後は再び17～18まで上げて花弁の発達を促すのが望ましい。</p> <p>また、キクは加温温度も高く暖房経費もかかるため、送風ファンを設置して施設内の温度ムラ解消に努める。</p> <p>イ 再電照</p> <p>12月出荷以降の作型では、「うらごけ」防止と舌状花数増加による品質の向上のための再電照及び花首伸長抑制のための矮化剤処理を行う。処理時期等は10月の作業内容を参照する。</p> <p>ウ 病虫害防除</p> <p>施設内が換気不良で過湿になると病害の発生が多くなるため、防除の徹底を図る。特に施設ギク栽培で大きな問題となる白さび病は施設内を十分換気し、過湿にならないようにすることが重要である。なお、毎年多発する施設では全面マル</p>	品 種 名	神馬	精興の誠	東菊	花秀芳	精興黄玉	花芽分化の適温度	18	18	15	15	18
品 種 名	神馬	精興の誠	東菊	花秀芳	精興黄玉								
花芽分化の適温度	18	18	15	15	18								

項 目	作 業 内 容
<p>(3) シクラメンの仕上げ時期の管理</p>	<p>子栽培が有効な手段になる。害虫ではハダニ、アブラムシ、スリップス類の防除を徹底する。</p> <p>11月は夜温も低下してくるため、15以下にならないよう適切に保温・加温を行う。また、ハウスを閉めると灰色かび病の発生が多くなるため、暖房機の送風ファンや循環扇等で空気の対流を図る。</p> <p>開花期以降の追肥は、窒素：リン酸：カリ比を2：1：3程度とし、5～6日に1回75～100ppmの液肥を基本に株の状態を見ながら施用する。また、蕾が上がり開花し始める頃より、固形肥料を5号鉢で2～3粒置く。</p> <p>出荷予定時期の1ヵ月前より、開花した花茎の抜きとりをやめ、5号鉢では20本、6号鉢以上では30本程度の花茎が揃ったら出荷する。</p>
<p>(4) 施設花き類の身近な防寒対策</p>	<p>3か月予報では、11月の気温は高い予想(10月25日高松地方気象台発表)であるが、急激な気温変化に対処できるよう、施設栽培では以下の防寒対策を講じておく。</p> <p>ア 古くなったフィルムは新しいものに張り替えによりハウス内への日射透過量を多くし、施設内はできるだけ気密にするために破損箇所は補修する。また、内張被覆も併せて準備し、出入口は二層～三層カーテンを設置して冷気の流入を防ぐ。</p> <p>イ 暖房機の安全使用(不着火、不完全燃焼防止)や熱効率を高めるため、事前に燃焼室の掃除をする。また、サーモスタットは精度の高いものを選定し、設置場所は地上1.2m程度の所とし、生育適温以上の暖房をしない。</p> <p>ウ 暖房機からの温風誘導ダクトの設置は、施設内の温度ムラが少なくなるよう適正に配置するとともに、送風ファンを設置してハウス内の温度ムラを解消する。</p>



写真3 出荷期を迎えたシクラメン